

あとがき

この本の企画に先立つ、この経緯について記しておきたいと思います。

2003年から2005年まで毎年12月に慶應義塾大学三田キャンパスにおいて「小学校英語」を主たるテーマとしてシンポジウムを開催しました。一連のシンポジウムは「慶應の暮シンポ」として定着し、毎回主催者の予想をはるかに上回る参加者を集め、活発な討論が展開されました。これらのシンポジウムの記録は『小学校での英語教育は必要か』、『小学校での英語教育は必要ない!』、『日本の英語教育に必要なこと』として、いずれも慶應義塾大学出版会から公刊されており、こちらも小学校英語や英語教育一般について考えるための必読書として多くの読者を得ています。

2003年のシンポジウムの頃は、小学校英語に対する異常としか形容のしようのない期待感が世間に充満し、その教科化は時間の問題としか考えられない状態でした。その状態に大いなる危機感を感じた私は2003年のシンポジウムにおいて「小学校で英語は必要か」と題して、その賛成派と反対派の論客に参集いただき、小学校英語の根本にある問題を浮き彫りにしようと試みたのです。

2003年のシンポジウムを受け、2004年には「小学校での英語は必要ない!」と題して、小学校英語というもろみがいかに有効性を持ち得ないものであるのかを明らかにするためのシンポジウムを開催しました。討論参加型司会者を依頼した故波多野諄余夫氏の登壇者一人ひとりに対する卓越した問いかけにより、小学校英語断固反対という素朴な反対論から脱却した、英語教育や言語教育の本質を見極めようとする取り組みかたが見え始めたのがこの頃でした。

そのシンポジウムの参加者を交えた討論において、参加者の一人であった小笠原林樹氏はフローから主宰者の私に対して、「このシンポジウムの成果を踏まえ、社会的行動を起こすつもりはないのか」と迫りました。そのとき、私は「いまのところ、そのようなつもりはない」とだけ応じました。

2回目のシンポジウムが終わり、3回目の、まとめのシンポジウムの構想を練り始めたとき、いまままだ明かすことができないできごとがあり、小笠原氏のいう「社会的行動」を起こす必要を強く感じ取りました。それが文部科学大臣に宛てた「小学校英語の教科化に反対する要望書」です。小学校英語反対といってもさまざまな立場があり、その立場の違いを越えて、小学校英語に対して、とりあえず、その「教科化」に反対するという一線で意見の集約を試みたのです。そして、1カ月にも満たない短時日の間に全国の英語・英語教育関係者をはじめとする50人の署名を集めることができました。中山成彬文部科学大臣(当時)宛のこの要望書は、國弘正雄英国エジンバラ大学特別特任教授と内田伸子お茶の水大学副学長にご同行願ひ、2005年7月19日、銭谷眞美文部科学省初等中

等教育局局長(当時、現文部科学次官)に手渡ししました。さらに、2006年2月14日には、小坂憲次文部科学大臣(当時)宛の、ほぼ同内容の要望書を、布村幸彦文部科学省大臣官房審議官(初等中等教育局担当)手渡ししました。

この要望書はマスコミでも広く報じられ、その後に公になったPISA学力調査における日本の児童・生徒の「読解力」の不足や藤原正彦や石原慎太郎ら母国語の重要性を説く論客の著書や発言がマスコミをにぎわあせたこともあいまって、「小学校英語どころではない」という状況が生み出されるに至りました。

そのような状況のなかで、私は2006年2月28日、中央教育審議会外国語専門部会(第12回)に招かれ、小学校英語に対する考えを述べるよう要請されました。その会合での私の話により部会の小学校英語賛成派の委員がその考えを翻すことになったとのうぬぼれはありませんが、その場にオブザーバーとして居合わせたマスコミ関係者には少なからぬインパクトを与えることができたと考えています。

この間にも、NHKテレビが「小学校英語、必修化へ」という誤報(文部科学省関係者)を報じたり、小学校英語教育指導者としてのお墨付きを与えることを旗印としたNPOがその活動を活発化させるなど、小学校英語に関するさまざまなきごとがありました。

そうした事態に惑わされることなく、また、単に小学校英語反対ということだけで終わることなく、英語教育の本質を探ることが必要であるという認識を深めた私、は、2005年12月、「締めめのシンポジウム」と位置づけて、「英語教育が本当にやらなくてはならないこと」と題する本編と「小学校英語を考える」と題する番外編のふたつのシンポジウムを一挙に開催しました。このシンポジウムも多くの参加者を得ることができ、また、活発な議論が展開されました。

当初からの予定どおり、「シンポジウム三部作」でシンポジウムのシリーズは完結させたのですが、多くの方々からその継続を求められたことと、なにも増して、私の内側にも新たな企画に対するエネルギーが湧いてきたこともあって、2007年12月に「ことばの力を育む 小学校英語を超えて」というシンポジウムを開きました。副題にあるとおり、小学校英語に対する止揚された対案としての「ことばの力を育む」教育を提案し、国語教育、英語教育、日本語教育などの関係者も交えて、そのありかたを探りました。

これらの一連の動きを振り返ってみると、小学校英語に賛成か、反対かという、素朴な対立の構図では捉えきれない、まことに興味深い問題がたくさん浮き彫りになってきたことがわかります。中でも重要なのは、小学校教育をどう捉えるかという次元の問題と学校英語教育をどう捉えるかという次元の問題です。そして、さらにこのふたつの次元は教育というものをどう捉えるかという、より一般的な拡がりを持つ問題に帰着するのです。この本の理論編がこれらの点についてのわかりやすい解説になっていることを望みます。

また、上に述べた一連の活動において、立場を越えて真摯に互いの意見を交わす機会を

得ることができました。なかんずく、松川禮子、直山木綿子、三森ゆりか、菅正隆、常盤豊、田尻悟郎、中嶋洋一、山田雄一郎、津田幸男、寺島隆吉、横溝紳一郎の諸氏(おおよそ、知遇を得た順)に感謝したいと思います。英語教育について広く、かつ、均整のとれた見識の持ち主である柳瀬陽介さんと津田正さんがさまざまな折りに意見交換に応じてくれたことにも感謝しています。

この本の企画を思いついたときに、共著者としてお願いするのはこの方をおいていないと考えたのが、窪園晴夫さんです。ことばについての研ぎ澄まされた分析力と豊かな知識に加えて、つぎつぎに飛び出す、的確かつ楽しい表現例にかなってから注目していたこともあり、共著のお願いをいたしました。幸い、快諾が得られ、この本ができました。遅筆で鳴らす筆者との企画をここまでひっぱりつけてくれたのは実質的には窪園さんです。

資料編に収めた「ことばの時間」の試み」を実践した上で、その内容を文章化してくださった、埼玉県立蕨高等学校教頭齋藤菊枝さん(慶應義塾大学訪問講師)は長年にわたる教育経験にもとづき、数多くの貴重な助言をしてくださいました。

イラストを担当してくれたのは早乙女民さんです。早乙女さんとは長いお付き合いですが、仕事と毎に、絵の雰囲気を変え、こちらの意図を十二分に読者に伝えてくれます。今回もおかげさまで楽しさが倍増しました。

最後に、「慶應の暮シンポ」三部作以来のおつきあいである慶應義塾大学出版会の小磯勝人さんは今回の企画にあたってもいろいろと有意義な助言をくださり、大助かりでした。ありがとうございました。

この本がきっかけとなり、小学校英語、英語教育、そして、言語教育、さらには教育一般について、新たな視点からの議論と実践が生まれてくることを心から楽しみにしています。

2008年 春

大津由紀雄